

博士論文審査および最終試験の結果

趙順文氏の論文は結合価理論を現代日本語に適用し、さらにそれを独創的に発展させようとしたものである。この論文の序論は結合価理論の概要が述べられ、第Ⅰ部（第1章－第9章）では主として現代日本語に結合価理論を適用した際の成果が述べられ、第Ⅱ部（第10章－第17章）では趙順文氏の独創による階段図分析法にもとづく成果が述べられている。

趙順文氏は序論で辞書記述と文法記述とは車の車輪のような相互補完的なものであると認め、そのための結合価研究の重要性を強調して各国における結合価およびそれと関係あるほかの理論を紹介している（フランスのテニエール、デュボワの結合価、グロスの語彙－文法論、日本における結合価と連語、旧ソ連における単語結合、その他イギリスの文型、collocation等。諸学者の「教える」という動詞の分析の例が示されている）。

伝統文法では文の構造分析に際してまず主語と述語に二分し、述語をさらに目的語あるいは補語その他の文の成分に分割し、これをもとに文型を立て、その過程で動詞は他動詞と目的語とに分類される。しかし結合価理論では従来の他動詞、自動詞という概念だけでは不十分として、文の成分を義務的補足成分と準義務的補足成分と添加成分に分ける。文型も結合価もその中心的な部分は動詞であるが、他方結合価理論と多くの類似点を持つ単語結合（連語）論では二つあるいはそれ以上の自立的な単語の結合によって従属的な文法的関連の基礎の上に作られる統辞論的構造としての単語結合（連語）がとりだされ、この中心は動詞のみならず名詞、さらには形容詞、副詞でもありうる。結合価は単語結合論の「結合可能性」にほぼ相当する。Collocationは多くの点で単語結合（連語）と類似点がある。

趙順文氏の論文の概要は次のごとくである。

第Ⅰ部。第1章では従来の結合価理論を日本語に適用した際の問題点を説き、述語の中心は動詞のみならず名詞、形容詞でもありうること、さらに複文の分析にも結合価理論を適用すべきことを説いている。第2章では述語の実現に伴う必須成分と随意成分を範疇素性（必須成分も随意成分も〈名詞組〉と〈副詞〉という範疇素性を持つ。〈副詞〉は従来の副詞のほかに接続助詞、一部の副助詞、接続詞、感動詞も加わる）、格形態（格成分とゼロ格成分。が格、に格…のように記す）、文法機能（主語、直接賓語、間接賓語、補語）、意味役割（主体、対象、客体、場所、時間、起点、着点、数量、命題、その他などの10項）の4つのレベルから分析している。第3章は動詞の必須成

分を扱ったものだが、主として石綿敏雄氏の動詞価に対して趙順文氏の資料により具体的に補足・修正し、意図動詞にかかる〈副詞〉の「第5章引用文」(…しようと)が実は結合価の一つに数えられるべきことを論じた。第4章は範疇素性について詳述したもののだが、必須成分の名詞組と副詞のさまざまなパターン別にそれぞれ該当する動詞のリストを作成している。第5章では第4章を基礎に第8章の1000語の動詞価を中心に必須成分どうしの結合の可能性、すなわち文型69種類と基本文型10種類を立て、それぞれのパターンに該当する動詞のリストを作成している。第6章は石綿氏の「日本語用言結合価表」の「意味役割」に関して、自分の採集した用例にもとづき検討を加えたものである。第7章では新聞のニュース記事の見出を材料として動詞価の省略(漢語動詞語幹, 格省略)を扱った。第8章では日本語学習に必要な動詞1000語余りの、第9章では「現代日漢大詞典」のうちの1000語の動詞の格形態について自己の用例にもとづいて従来の研究を補正したリストを提出している。

第Ⅱ部。第10章で趙順文氏は階段図分析法なる方法で単文のみならず複文をも結合価で分析しうるとし、それが伝統文法, 生成文法, 三上文法などによる長文の分析法と比べて比較的簡明な方法であると主張している。第11章以下は複文におけるさまざまな問題を結合価文法に基づき論じたものだが、第11章では採用した用例を通して主に名詞節内の名詞組の主題化の可能性を述べたものであり、第12章では主に状態述語(名詞述語, 形容動詞述語, 形容詞述語)の主語を装飾する名詞節のテンスを扱い、第13章では主として新聞記事の文を材料として「など」の機能を詳細に論じており、第14章ではこれまた新聞記事の文を材料として「として」を論じ、第15章では自己の採集した3万余りの用例にもとづき、「～て, ～から」, 「～て, ～ながら」; 「～て, ～けれども」, 「～て, ～のか」等々の三節複文のパターンを抽出し、それぞれの「～て」の機能(副次的な働き, 継起的・並列的な働き, 原因理由を表す)の連続性について述べている。第16章では副詞節のテンス(絶対テンス, 相対テンス, 中立テンス)を扱ったものだが、「中立テンス」(「心象の現在」を通して「過去」とあるべきところに使われる「非過去」のA'系列時間)が「～ので」, 「～のに」, 「～し」, 「～ながら」, 「～とは」などの補文の副詞節内に生じしうることを述べている。

趙順文氏の研究の姿勢として、1) 先行研究, 特に日本人の研究をよくフォローしつつ、その欠点を補うべく努力を続けていること(特に第3章-第6章), 2) 日本の文学作品, 新聞等から生きた用例を採集し、具体的な議論を行っていること(特に第3章, 第6章-第8章, 第11章-第15章)を挙げることができる。

趙順文氏の研究は日本語教育において特に動詞を総体的に結合価文法との関連においてどのように特徴づけるべきかに関心が集中しており、その具体的な成果が動詞

1000語の動詞価のリストとなっており(第5章, 第6章, 第8章, 第9章), 他方趙順文氏の独創といえるものは特に第Ⅱ章にあらわれるような, 複文をも結合価理論により理解しようとする事, 特にその階段図分析法にあると言える。

しかしながら趙順文氏の論文に対する次のような批判もなされた。

- ①結合価理論それ自体, それと単語結合論とのちがい等に関する理解が不十分であり, かつ筆者のそれらに対する態度がかなりあいまいである。
- ②趙順文氏の修正結合価理論によれば, 動詞のみならず, 述語としての形容詞, 名詞も扱うはずだが, 氏の論文は事実上動詞しか扱っていない。
- ③材料にかたよりのある。新聞を多く利用しており, かつ動詞1000語に関しては格形態の記述があるのみで, 各々の動詞を含む例文がない。さらに第15章ではある種の辞典の用例のみを挙げているが, これでは日本語の実態を反映しているとは言いがたい。
- ④必須成分と随意成分の判定に関してこの論文は新たな解決策を示してはいない。また「文法機能」と「意味役割」についても独自の深い考察があるとは認められない。
- ⑤複文をも結合価理論で解決しようとの特に第Ⅱ部での趙順文氏の姿勢は, 結合価理論が従来単文の構造に限定されて考察されてきただけに, あまりにも大きな問題をはらんでおり, 充分説得的とはいえない。特に第Ⅱ部では趙順文氏の指摘する個々の事実が結合価理論をどれほど補強するものであるか疑わしい点が多い。

以上のような指摘にもかかわらず, 趙順文氏が外国人研究者としては極めてよく大問題を包括的にとらえようとする意欲があること, 氏が日本語のみならずヨーロッパ諸語, アジア諸語にも関心を持ち, 日本語の問題をそれらとの対比においてもながめようとしていること, この論文が当該分野の研究水準に達しており, しかも趙順文氏も述べているように, 今までのこの分野での氏の業績のくぎりとしてこの論文を位置づけること, 以上の批判すべき点は趙順文氏自らよく意識していて今後の一層の研究の中で解決する意欲を見せており, かつそれが期待しうることを認め, ここに審査委員全員一致して趙順文氏が博士号を受理するにふさわしいものと判断する。